



神輿に水を、街に安心を 深川の街を守って40年

深川消防団 団長 鳩貝 裕幸さん

今年4月に深川消防団の団長に就任した鳩貝さんは元料理人。消防団員としてこの街を40年守り続けてきた。深川八幡祭りの放水と、団長としての意気込みをうかがった。

【プロフィール】

1955年江東区東陽町生まれ、在住。高校卒業後、調理師学校を経て京都で10年間料理人として修業し、1987年「京料理 鳩貝」オープン、2年前に閉店。1985年深川消防団入団。2026年4月深川消防団第16代団長に就任。趣味はラグビー観戦と落語。柳家喬太郎のファン。

—— ずっと東陽町なんですか？

生まれも育ちも東陽3丁目です。この地で約40年、京料理の店を営んできましたが、今は閉店し、消防団の活動が中心になりました。

うちの始まりは祖父が大正6年、

この地で炭屋を始めたことで、父もその跡を継ぎました。当時、この辺りには洲崎遊廓があり、炭や練炭の需要が非常に多かったんです。遊廓があったことで町全体が活気に満ち

ていた時代でした。

私が高校生になる頃には都市ガスが普及し、父から「この商売に先はないから継がなくていい」と言われ、それが料理人を志したきっかけです。調理師学校を卒業後、10年間京

まちは人となり。⁴⁹

都で修業し、その後、東京でさらに2年修業してから店を開きました。

—— 消防団は何歳の頃から？

30歳の時です。店を構えたのと、ほぼ同じ頃ですね。父も消防団員だったので「自分もいつかやるんだろうな」という思いは、ずっとどこかにありました。

入団して最初に叩き込まれるのが「規律」です。右向け右、回れ右、敬礼……学校で習ったはずなのに、みんな忘れているでしょう（笑）。でも火災現場では、一人で火を消すことはできません。号令一つで全員が正確に動くための土台が、この規律なんです。装備はこの40年ですいぶん近代化しましたが、組織の根幹にある規律の大切さは、今も昔も変わりません。

実際、火災そのものは昔より少なくなりました。そんな中で印象に残っているのは、5、6年前の正月、

出初式の日塩浜で起きた大規模なビル火災ですね。消火の中心は消防署員ですが、我々も交代しながらサポートに入り、私も30分ほど筒先を持って放水し続けました。

—— 深川八幡祭りの放水も有名です。

実は我々にとって、八幡祭りの「水かけ放水」は最高の訓練の場なのです。火災現場では一度放水が始まれば1時間、2時間と続くこともあります。普段の訓練でそれだけ長時間、水を出し続ける機会はなかなかありません。

ところが祭り当日は、先頭から最後尾の神輿が通り過ぎるまで、およそ2時間、放水しっぱなしです。交

代しながら筒先を持ち、強い水圧に耐え続ける。10分もすると手が震えてくるほどの重労働ですが、深川消防団が鍛えられているのは、この実践さながらの経験があるからです。

神輿への放水にもコツがあります。いきなり強い水圧で当てると神輿を傷めてしまうし、担ぎ手もケガをしかねません。だから最初は噴霧にして、少しずつ範囲を広げながらシャワー状にしてください。初めて担当する団員は、必ず練習します。

放水する側だけが知っている楽しみもあるんですよ。水の角度や位置で、神輿がある程度誘導できるんです。例えば交差点の真ん中に神輿を持っていきたい時、そちらに向けて水を出すと、担ぎ手が自然と水を求めて寄ってきてくれる。自分の思う場所に神輿を動かせるのは、放水する側の特権かもしれませんね。

——いつから放水が
始まったのですか。

昭和40年頃です。大門通りで水かけの人手が足りなくなっただけをきっかけに、消防団が協力するようになりました。昔は家や商店の前に、水を張ったたらいがずらっと並び、バケツで神輿に水をかけるのが当たり前でした。でもマンションが増え始めた頃から、それが少しずつ減っていったんです。

今年も深川消防団では約20か所で放水を行います。私は団長として各所を回りますが、何より大切なのは安全です。実際、ホースに足を取られて転倒する方もいますから、観客の皆さんには足元にも気をつけながら楽しんでいただきたいですね。もともと水かけは、神輿の通り道を清める神事です。今は熱中症対策

の意味合いも大きくなりましたが、この伝統はこれからも大切に守ってきたいです。

——深川消防団の
特徴を一言でいうと？

横のつながりの強さ。これも実は祭りが深く関係しています。団員の中には神輿総代を兼ねている人も多く、その場合は祭り当日、神輿について歩くので放水には入れません。そこで、富岡八幡宮の氏子区域ではない、森下や千田などを受け持つ団員が応援に来てくれるんです。

逆に、森下の深川神明宮の祭りで放水する時は、富岡八幡宮の氏子区域の団員が手伝いに行きます。深川の祭りの多くは水かけ祭りですからね。こうした助け合いは、団員同士の一体感も生んでいます。

もう一つ特徴を挙げるなら充足率の高さです。深川消防団は定員に対して充足率90%以上もあり、表彰も受けました。なり手不足に悩む地域が多い中で、現在285名の団員が活動しています。

団員は地域住民だけでなく、深川で働く在勤者も入団できます。特に豊洲や有明といった臨海部には企業も多く、そこで働く方々が団員として活動してくれていることも大きいですね。昼間、住民の多くが仕事で街を離れている時間帯に、在勤の団員がすぐ動ける。なくてはならない存在です。

——団長として今後
取り組んでいきたいことは？

まだ就任して数か月ですから手探りの部分もありますが、一番の役割

は町会や自治会、行政と消防をつなぐ「橋渡し」だと思っています。地域の皆さんの声に耳を傾けながら、少しずつ信頼関係を築きたいです。

私が大切にしているのは、顔が見える関係です。今は個人情報問題もあって、ご近所付き合いも難しくなっていますが、普段から「おはよう」と声を掛け合っていれば「あのお宅は今旅行中だ」とか、「あそこには高齢の方が住んでいる」といった情報が自然と入ってきます。そういう生きた情報こそ、災害現場で一番の武器になるんです。

もう一つは、時代に合った消防団づくりです。昔ながらの訓練や伝統はもちろん大切ですが、その一方で、より実践的で効率の良い内容も取り入れていきたい。具体的なことはこれからですが、省ける部分は省き、本当に現場で役立つ訓練に、より多くの時間を割けるようにしていく。消防団をより良い形に発展させていくことも、団長としての役割だと思っています。

——40年間、消防団を続けて
こられた原動力とは？

やはり、一番は地域愛です。祭りも災害時も、すべては「深川のために」という思いからです。きつと団員みんな、同じ気持ちだと思います。消防団員はそれぞれ本業を持ちながら活動しています。訓練は決して楽ではありませんが、終わればまた自分の仕事に戻る。そのオンとオフの切り替えが、かえって良い刺激になり、長く続けられる理由の一つかもしれません。

もし街角で活動している団員を見かけたら、ぜひ一言「苦勞さん」と声を掛けていただけたらうれしいですね。その一言が、何よりの励みになります。これからも若い団員が次々と加わり、活躍できる組織であり続けたいと思っています。



今年も8月の深川八幡祭りでは消防団の放水が行なわれる